

令和8年度 第1回 松本「シンカ」推進会議 要旨

日時：令和8年6月29日（月）

午前10時00分～

会場：第一応接室

1 開会

2 局長あいさつ

3 座長あいさつ

4 議題

(1) これまでの議論を踏まえた市の取組状況について

ア ゼロカーボンの取組について（担当課：環境・地域エネルギー課）

イ サイクルツーリズムの取組について（担当課：自転車推進課）

ウ グリーンインフラの取組について（担当課：森林環境課、都市計画課）※事務局説明

(2) 4つの「重視する視点」の市の取組状況について

ア 若者と女性の挑戦と定着を支える社会基盤の構築（担当課：総合戦略室）

イ 暮らしの質を高める都市機能の強化（担当課：中心市街地活性本部）

(3) 「三ガク都のシンカ」について

(4) 今年度の重点テーマについて

(1) についての意見

- E V車用の充電ポイントを増やすという議論はされているか。市民が市内を移動するには問題はないと思うが、観光客にとって充電ポイントの増加は必要ではないか。
⇒ これからE V車が普及していく中で、充電ポイントをどこに設置していくか考えていくことは重要。優先的に松本市は観光地に急速充電気を設置している。
- サイクルツーリズムについて、サイクリストとの交流があると良いのではないか。
- グリーンインフラを進める中で、北欧のように幼稚園や保育園に森をつくり、子どもたちが緑や土に触れる環境が増えると良い。
- 再生可能エネルギーについて、水力発電という視点が広がると、里山に興味を持ってもらえるのではないかと思う。
⇒松本市は水資源が豊富にあり、市内で地元企業が主導する小水力発電がもうすぐ運転開始になる。また、それとは別に、用水路でも発電できるくらいの小水力発電も事業化できるようになってきている。MZCC（松本平ゼロカーボンコンソーシアム）でも話題に上がっており、地元と一緒に取組み、地元の人に使ってもらえるような開発を進められるようにしていきたい。
- 資料1（P39）「皿まちなかの水に親しむ『憩いの水辺空間づくり』」「IV自然とともに歩む『安全・快適のまちづくり』」について、防災の観点からも、他の事業と関連させ連携しながら進めて

ほしい。川は魅力であると同時に、災害のリスクもある。川を知る、水辺を知るといように、水との付き合い方を大切にしてほしい。

- 防災も含めて、松本が水とどう付き合っているかということは、日本や世界をリードして見せられるものになっていくのではないかと思う。

(2) についての意見

- 中心市街地について、防災におけるフェーズフリーの視点も入れてほしい。

(3) についての意見

- 課ごとの施策が、一人の人生を追っていったときに、どこにつながっていくかがわかる仕組みができると良い。
- 社会実験をさらに活性化していくことで、子どもも大人も学ぶだけでなく、まちも学ぶという流れになる。“学ぶまち松本”になると、これからつながっていくと思う。
- 社会実験は、行動目標の「いどむ」にあてはまる。失敗しても「みとめる」「まなぶ」につながっていくことが見える状況になると良い。完璧なものを提供するという形ではなく、みんなで作っていくようなことが社会実験だと思う。

(4) についての意見

- 教科の学びは学校の中にあるが、地域での学びというもの、まちでの関わりの中での学び、広い意味での松本ならではの学びというやり方もある。
- 「学び」は、健常者視点で“標準的なもの”“より良くあること”というような、成果を目指していくものという印象につながりやすい。正解を求めるのではなく、他者との出会いで視点が広がったり、自分には無い視点を見つけたりと、それぞれがどのように暮らしているかを知り合うような、フレキシブルで広い概念の「松本ならではの学び」になると良い。
- 7分野47施策が相互にどう連携できるか、ワークショップを行いたい。
- 保育園～大学まで、それぞれの世代において、地域との関わりがピンポイントであることが多いように思う。まちづくりの入口や接点がどこにあるかわからないが故に関われないのではないか。寺子屋事業やフリースペースなど、若者に限らず地域の人に関わってみたいと思った時に、ふらっと行けて、そこが地域と関わる「窓」になっていくと良い。
- 「三ガク都のシンカ」はあくまでも手段で、本来の目的は市民の幸福度だと思う。アンケートなど、目的の達成度を数値化し、測れるようにすることが必要。
- ゼロカーボン市民アクションプランの「知ろう聞こう始めよう」にあるように、当事者や子どもの学びなど意見を聞くプロセスがあると良い。

(全体を通して)

- 議論の重点テーマについて。三ガク都のシンカに関する理念的な部分については概ね良いと考える。これから進めていくにあたり、成果指標だけでは捉えられない「ものさし」を作ることから早くから着手した方が良い。例えば、「創る」は0から1がどれだけ生まれたか。評価が難しいことは

前提で、広い視点でものさしを作っていけるとよい

- 「学び」については、固定的で“勉強”的な定義から離れて、「学び」を議論していけると良い。勉強だけでなく、ウェルビーイングや自己実現を支えられるという点で、対象や方法をどうしていくか考えていくことが大切。
- 多様な人の声を吸い上げるスキルや仕組みについては、バージョンアップできると思う。これまでのようにアンケートやワークショップで意見を吸い上げる手段は併用しつつ、今の時代ならではの、潜在的で言語化できていない部分を目に見える形にしていくことが、これから市の土台として大事だと思う。